光市医師会報

昭和60年10月発行

No. 157

my car　シリーズ(8)
ボルボ　20L型（1972年）
富　恵　　哲 先生

光　市　医　師　会

医師会月間行事

◎昭和60年 9 月度理事会

昭和60年 9 月10日（火）午后 6 時45分～

於　光市錦町　ミサ（和室）

議題

(1) 医師会員　喜寿の祝の件　（会長）
　小嶋史郎先生の御祝

(2) 乳児運動発達検査について
　（福本副会長）

(3) 医療機関における胃癌検診の今后の方針について　（福本副会長）

(4) その他

1) 山口県医学会雑誌の原稿依頼

2) 次期参議員選挙に掛る自民党員の獲得の現状

3) 家庭看護教室（市保健センター）の講師依頼

○緑友会コンペ

60．9．8　於　周南cc

	out	in	Gross	HD	NET	order		新HD
河内山正	44	44	88	17	71	2		16
光　武	50	45	95	10	85	BB	NP	
藤　原	61	61	122	30	92			
佃	52	47	99	25	74			
儀　本	45	41	86	8	78		NP	
前　田	50	47	97	19	78			
横　山	49	46	95	16	79			
森　本	55	42	97	18	79			
竹　中	48	52	100	25	75			
大　野	51	48	99	20	79			
諏　訪	44	45	89	18	71	優勝		13
藤　村	41	44	85	9	76		DC	

○第 6 回周南三市医師会、歯科医師会、健保組合親睦ゴルフ大会

60．9．15　周南ＣＣ　幹事　新日鉄健保

会員諸通達

○薬価基準の一部改正等について。　県医発（60．9．5）

○山口県医学会誌第20号原稿提供のお願い　県医発（60．8．29）

○９月度月例会中止。　市医発（60．9．17）

○資格関係過誤発生原因調査の結果について。　県医発（60．9．13）

○ゴルフコンペの案内　（下松・光合同）　市医発（60．9．20）

○91回周南医学会の通達

my car シリーズ

私の車　　**とみえ　さとし**

ボルボのセダンである。

前回、此のページで、私の哀れな車を紹介したお陰で、娘は恥しいと、ブルーバードを敬遠、専ら、此方を乗り廻して居る。私が乗るのは、ロータリーの例会へ顔を出す時のみ。私の車でなく、吾が家の車と云った方が良い状態である。

ボルボ、1972 年製、20Ｌ型、2000cc。13年以上交際っている。走行距離、７万キロ一寸。「先生、ええ加減で、買い換えませんか」と、自動車屋さんが云うが、全然買い換える気は無い。購って５年目、２万位走った頃であろうか、ボルボの３ナンバーを売り込みに来た事がある。試走して、

ハンドルは軽いし、インテリアは落着いているしで、一寸買う気になり、さて、「下取りは幾くら？」と聞いた所、即座に「減価償却が終って、始んど只ですよ」と来た。自動車は、幾くら走ってなくとも、何年製で価値が決るとか。僅か2万位しか走ってなく、その上、丁寧に扱って来た吾が愛車が只同然とは。さすがに、カチンと来て、「俺の愛車をそれ位の価値しか無いと考えるなら、もう買はん」と施毛を曲げて、それっ切りである。その後、50万で下取りを云々、と云って来たが、取り合ず、現在に到っている。

支払基金に通っていた頃、椿峠で、ペチャンコに潰れた軽自動車の事故にお目に掛った。反対車線のダンプが飛び込んで来た事故で、運転の女性は、あの世行き。それ以来、益々愛車を離す気が無くなった。ボルボのスエーデン製鉄板の厚さを考えたら、他の車を買う気にはなれない。前後が潰れても中央の客室だけ残る構造だとか、その上、鉄板の厚いことから安全性を考えた次第である。自分が、まともな運転をして居ても、反対車線から飛び込んで来る御時勢である。古い鉄の塊りに我慢して乗って行く積り。

ついでに息子には、「お前の学資のお蔭で、親爺は、車も買えん」と発破をかける一つの手段でもある。ものは云い様である。

昭和一桁、「物を大事にしましょう」、「欲しがりません勝つまでは」の標語の下で育った腐曲りの人間の愛車に恰好である。

―ある休日―

藤原　邦彦

台風も予報程は山口県を襲いもせずに過ぎ去った秋晴れの日曜日、一人でぶらりと、久し振りに映画館へ足を向けた。雑誌で2～3度この映画の内容が載っていたので興味を覚えていた為でもある。残虐で陰気臭い感じの雑誌の内容でもあるし、外は徳山産業祭とかで景気良くやっているのに、きっと観客は少いだろう等と思いながら入ったが、予想に違わず、チラホラと椅子が埋まっている。うちの外来と同じだなと思いながら椅子を占める。

題はキリング・フィールド

カンボジャでの政府軍と赤いクメール（ポル・ポト軍）との戦い、その周辺のカンボジャの人々をアメリカ人記者とカンボジャ人通訳（この人は実際の経騒者）の目を通して描いている。

同じ国民の集団が、団結できない、又は団結しなかった個々の人間を殺す。国家間の戦争や、階級間の争いや思想上の対立とも異る争いである。学生、大学教授（教師）、医者は新しい国家に必要だからと名乗

らせ、抹殺する。その結果、生き伸びた極々少数の医者が、現在のカンボジャの医療を天手古舞で担っていると聞く。

又、子供の目が黙して働く人々の中から“人民の敵”をみつけ消す。死体の山、人骨の山、どれをとっても正気の沙汰ではない。

人間性、権利、自由、誇り等無く、果ては食物も生きるのがやっとの量が与えられる。題名の通り、国家と言うより、フィールドが適切な言葉かも知れない。

今の日本は繁栄の名を欲しいままとし、役に立たないと思った物は、置くのも邪魔とばかり捨ててしまって、都合の良いものだけを残す。アメリカでは町、工場毎捨ててしまうそうだが、物が人間に置きかへられるとキリング・フイールドが発生する。学生や教師や医者の様な輩は、生意気で必ず一家言を成す様な振舞をする。赤いクメールにとつて彼等は邪魔物でしか無かったのであろう。今は役立たずの邪魔者（物）でも、捨ててしまへば御仕舞いで、倉庫の片隅にでも置いておけば、いつか役に立つ時期が来る。今の日本人は兎小屋に住んでいるから、とてもそんな余裕は無いよと言われれば、その通りだが、今は亡くなった私の祖母は何でもかんでも捨てないで取っておいて、必要になると、がらくたの中を捜していたことを思い出す。邪魔物を捨てる序でに、人間の大切な心のある部分も捨てている様な気がしながら映画館を後にした次第。

あとがき

暑さ寒さも彼岸迄とは良く言ったもので、めっきり涼しくなりました。お元気でしょうか。先月は光医師会始って以来の事か（？）と思われますが、例会が無く先生方の顔がみられなかったのは残念でした。

今回富恵先生にボルボの原稿を載き、他の事項と共に整理しましたら、原稿が圧倒的に不足と判り、急遽、私の駄文で埋めた次第です。

一日中、診察室の中に蟻地獄の様に居りますと、外の世界が良くみえますが、井の中の蛙が大海に出ても生きる術を知らず、キリング・フイールドよりはましだろうと思って、じっと我慢の毎日を過ごしております。

発行所	光市医師会 TEL 0833 72－2234
発行者	竹中昭二
編集者	会報編集委員会
印刷所	光市御崎町 中村印刷株式会社